

《八重潮》の成立と展開

—日本軍政下のジャワにおける公募歌曲—

丸山 彩

(立命館大学非常勤講師)

織田 康孝

(立命館大学大学院・日本学術振興会特別研究員)

1. はじめに

1942年3月に日本軍（第十六軍）が上陸し、日本軍政を開始したジャワにおいては、終戦までの間、日本語の歌が普及していった¹⁾。筆者は、『立命館平和研究』第18号において、ジャワにおいて公募によって作られた歌曲《八重潮》が成立する過程を明らかにした²⁾。本稿では、《八重潮》の成立とその後の展開について、新たに発見した史料や調査から、前稿の補足をしたい。

なお、本稿では、特定の資料の引用を除き、「八重潮」の表記を用いることとする。また、本稿における引用史料中の旧字体は、すべて新字体に改めた。

2. 《八重潮》の成立

1942年6月、当時の第十六軍司令官兼蘭印総督であった今村均の発案により、宣伝班が中心となって、『うなばら』紙上において「和唱歌」の歌詞が募集された³⁾。応募作の選定に関わった浅野晃によると、『うなばら』での募集は反響を呼び、ジャカルタのみならず、ポゴール、バンドン、スマラン、スラバヤ、ジョクジャカルタをはじめ、さらに遠方からも応募があったという⁴⁾。翌月27日には佐々木隆の「八重潮」が当選した。当選作は日本人上等兵の作品ではあったものの、現地住民からの応募は日本人将兵の約2倍半もあった⁵⁾。そこから、当時内地でさかんに実施されていた歌曲募集が、ジャワにおいても幸先よく開始したことがうかがえる。同年8月6日には、当選作「八重潮」の歌詞に対する作曲も募集された。そして、同年の明治節、11月3日の19時半より、バタビヤ市立劇場で発表会が開催され、治部隊軍楽隊による《八重潮》の初演奏がなされる予定であると報道された⁶⁾。この発表会は、日本およびインドネシア各40人の男女が舞台上で向かい合うかたちで歌われたという⁷⁾。

映画『八重潮—南方唱和の歌—』⁸⁾では、宣伝部長・

町田敬二⁹⁾と後の初代インドネシア大統領・スカルノの演説が放映される。スカルノは演説の中で、《八重潮》を美しいとした後、1番から3番までの歌い方を説明し、インドネシアと日本は同じアジアであるため、両者の目標、つまり「大アジア」の理想を達成するため、ともに働かなければならないと主張している。スカルノが《八重潮》について演説をし、映画の冒頭に収めて民衆に対して放映していることから、軍政初期のジャワにおける宣伝工作の手段として、《八重潮》のもつ意味が大きかったことが予想される¹⁰⁾。スカルノの演説に続いて、野外での軍楽隊の演奏を伴奏に、人々が野外で整列して斉唱する様子が映し出される。そのため、バタビヤ市立劇場が野外劇場でない限り、映画での斉唱は発表会当日の様子ではなく、映画のために撮影されたものである可能性が高い。また、発表会当日の様子は、ラジオでも放送されたため、ジャカルタ郊外の人々の耳にも届いたという¹¹⁾。

《八重潮》の発表会については、1942年10月29日付『うなばら』における事前告知の記事のみで確認ができ、現存する『うなばら』が同年10月までであるため、前稿においては、発表会当日の様子を紙面上で追うことはできなかった。しかし、その後インドネシア・ジャカルタのPerpustakaan National Republik Indonesia（インドネシア国立図書館）において、同年10月から11月分を含む現地語新聞『Asia Raya』（以下、『アジア・ラヤ』）の紙面を確認することができた¹²⁾。発表会に先立つ、同年11月2日付『アジア・ラヤ』には、《八重潮》の五線譜が掲載されており、作詞は佐々木隆、作曲は治1602部隊軍楽隊とされている¹³⁾。

また、1942年11月5日付『うなばら』にて報道された、《八重潮》の発表会の様子が浅野晃『ジャワ戡定余話』（白水社、1944年）に引用されていた。現存する『うなばら』の紙面は同年10月31日までで、その後が確認できないため、以下に転載したい。

南方唱和の歌『八重汐』の発表会は、明治節の

三日夜八時から、ジャカルタ市パッサル・バルー橋畔の市立劇場で行われた。会衆約一千名、場内は定刻早くも立錐の余地もないまでに埋めつくされた。国民儀礼ののち、町田宣伝班長から、歌詞及び歌曲募集審査経過の報告があり、歌詞当選者の佐々木隆一等兵、及び歌曲佳作入選の市田勇少尉、ジャカルタ市クマラット在住のデニー・マラ・トビン君に対し、同班長よりそれぞれ表彰状、賞品の授与があり、ついで発表会に移った。飯田信夫囑その司会で、磯田隊長指揮による軍楽隊の演奏で、荘重勇壮な曲が披露されるや、約一千の会衆は、その美しい調べに思はず陶醉境に引きずり込まれる。ついで一番、二番と、磯田隊長の丁寧な歌ひ方指導があり、忽ちにして全会衆による『一千名の合唱』が展開された。さらに軍楽隊に代つて、市民病院の看護婦さん達約六十名、女子教員練成所及び若葉技芸学校の原住民女性約百名の大合唱が行はれた。『日本人から原住民に呼びかけて歌ふ』一番を日本人女性が、『原住民がこれに応へて歌ふ』二番を原住民女性が合唱し、三番を双方相和して斉唱すれば、日本人と原住民の渾然一体となつた現実の姿がここに具現して、全会衆の昂奮は最高潮に達した。くり返しくり返し高らかに斉唱するにつれて、会衆もこれに和し、天にも響け地も裂けよと歌ふその声は、聖戦下南方第一線で明治の佳節を寿ぐにふさはしい感激そのものであつた。会衆に交つた兵隊さんの中には、『涙が出るよ……』『俺は何だか胸が一杯になつた』といった囁きが洩れる。原住民の中にも、汗をふくような恰好で感激の涙を拭ふ姿も見えた。劇場の周囲には、場内の昂奮も伝へ聞いて集つた群衆が、歓呼の声を挙げてゐる。係員もその熱意にほだされて柵を取り外すと、雪崩のやうに場内に流れ込み、廊下の外まではみ出す程であつた……¹⁴⁾

『うなばら』では、日本人と現地住民の男女ではなく、それぞれの女性に向い合つて歌う様子が伝えられている。それに先立って、軍楽隊長より、集まつた会衆への歌唱指導が実施された。《八重潮》発表の場は、明治節当日ということもあり、現地住民と日本人が集う一大イベントとなつたのである。発表会では、町田宣伝部長から歌詞と曲の募集の経過について報告があり、作曲の佳作として、日本人将兵と現地住民がそれぞれ1名表彰されている。しかし、彼等の作品は佳作

にとどまり、最優秀作品はなく、完成作は治1602軍楽隊によるものであつた。作曲の募集が開始される以前には、飯田信夫が《八重潮》の作曲を構想中である旨が報道されており¹⁵⁾、完成作の作曲には飯田信夫も携わつたと見られる¹⁶⁾。

3. 《八重潮》の普及に向けて

このように、1942年11月3日に発表された《八重潮》は、同年11月9日にジョクジャカルタのシナル・マタハリ社¹⁷⁾によって編集・刊行された歌集 *NJANJIAN NIPPON OENTOEK OEMOEM Djilid ke-I* (一般向け日本の歌 第1巻) に収録されている¹⁸⁾。同歌曲集には、34曲の日本語の歌の数字譜と、日本語の歌詞が収録されており、歌詞は日本語の歌詞が現地語のアルファベット表記で掲載されている。発表からわずか7日で、ジョクジャカルタで出版されたということは、《八重潮》の公募を主導した宣伝部とシナル・マタハリ社が、楽譜の普及に向けて提携をしていたことも指摘できよう。

前稿においては、1943年1月及び5月に『アジア・ラヤ』紙上で《八重潮》の翻訳懸賞が実施されたことについて言及した。また、発表会の直後には、《八重潮》の翻訳と現地語で歌うコンテストが開催される旨が報じられている¹⁹⁾。しかし、『アジア・ラヤ』を概観しても、翻訳の当選作は見当たらなかつたところ、*Almanak Asia Raya 2603 : Tahoen ke-I, Djakarta, Asia Raya, Bagian Penerbitan, (2603)*²⁰⁾ (『アジア・ラヤ』年鑑1943年版) に《八重潮》の現地語訳が掲載されていることが確認できた²¹⁾。同史料には、数字を併記した五線譜および、日本語の歌詞も掲載されている。

また、1944年に刊行された、ジャワ軍政監部編『*Seinen no Uta* (青年の歌)』には、《八重潮の歌》(同歌曲集表記のママ)の数字を付された五線譜と現地語訳が収録されている²²⁾。これらの五線譜・数字譜の調性は、C-durで、前稿で提示した譜例とほぼ同じものである。

さらに、内地に帰還していた浅野晃のもとに、ジャワより印刷された《八重潮》の楽譜が送られてきた²³⁾。浅野が内地に戻つたのは、《八重潮》が発表される以前の1942年10月であるため、同曲が発表された後に、歌曲集とは別にジャワで《八重潮》の楽譜が印刷されたのであろう²⁴⁾。

《八重潮》は発表された翌月の1942年12月には映画が上映されたほか、『アジア・ラヤ』紙上、同紙の年鑑、

および *NJANJIAN NIPPON OENTOEK OEMOEM Djilid ke-I, Seinen no Uta* という 2 つの歌曲集に掲載されたことで、普及していった。筆者らがインドネシアへ調査に訪れた際、高齢の女性が自ら《八重潮》を歌ってくれた²⁵⁾。この女性は当時ジャカルタ近郊で生活していたことから、唱和する機会があり、耳に馴染んでいたのかもしれない。また、当時、中部ジャワのテガルに住んでいた、1931年生まれの女性によると、1992年にジャカルタで開催された同窓会において配られた歌詞の冊子²⁶⁾に《八重潮》の歌詞が一番のみ掲載されていたという。これらは、すべて日本語の歌詞であるため、現地語の歌詞も作成された²⁷⁾といわれるものの、それが『アジア・ラヤ』紙上での懸賞の当選作であったのか、さらには実際に現地語の歌詞で歌われたのか、不明の域を出ない。

4. 日本国内への伝播

このように、ジャワで広がりを見せた《八重潮》は内地へも伝わった。1943年に刊行された『スメラ民文庫』第14輯（スメラ民文庫編集部、世界創造社）の3～4頁に「八重汐」の歌詞が掲載されている。1番の歌詞には、「日本人より現住民に呼びかけて歌へる」、2番の歌詞には、「原住民之に应へて歌へる」、3番の歌詞には「両者唱和のことば」とそれぞれ説明が加えられている。さらに、同書巻末には《八重潮》の譜面も掲載されている。スメラ民文庫編集部の責任者は、宣伝班員として従軍経験があった清水宣雄が務めていたため、清水が内地に《八重潮》を紹介した可能性が高い。

また、同年刊行された西谷弥兵衛『日本経済頌』（日本思想体系、旺文社）の序詞として、「八重汐」が引用されている。《八重潮》の1番から3番までの歌詞である²⁸⁾。同書においては、「佐々木隆作詞、ジャワ派遣軍選定、南方唱和の歌『八重汐』。第一節は日本人からの呼びかけ、第二節は原住民の叫び、第三節は日本人と原住民の唱和」と説明がされていた²⁹⁾。

『スメラ民文庫』第14輯は1943年6月5日印刷（発行は同月15日）、『日本経済頌』は同年6月15日印刷（発行は同月25日）とほぼ同時期に刊行されている。後者の序は同年5月6日に執筆されていたため、西谷が『スメラ民文庫』から、《八重潮》の存在を知った可能性は低い。《八重潮》がどのような経緯で日本国内に伝わり、さらに普及しえたのかについては、今後の課題としたい。

5. その後の《八重潮》

1942年11月3日に発表され、「南方唱和の歌」とされた《八重潮》は、発表の様子を伝える映画が上映されたほか、歌曲集への掲載を通して、さまざまな場面で歌われた³⁰⁾。1948年、オランダの軍事裁判を受けるため、今村均はラバウルからジャワへと送還された。今村がストラスウェイク刑務所に収監された翌日、1,000人を超えるインドネシア囚人たちの《八重潮》の大合唱（正確には斉唱）が刑務所をつつんだという³¹⁾。インドネシア囚人たちは、かつてオランダからの解放の立役者となった今村を《八重潮》の合唱で歓迎したのであった。

以上、本稿では前稿に引き続き、歌曲《八重潮》の発表とその後の普及について、新たに発見した史料を加えて、明らかにした。しかし、文字史料だけで実際を追うことは困難であるため、今後も現地での歌の認知度の調査を行ない、次世代に渡っても歌い継がれているのか、検証していくことが必要である。

【注】

- 1) 日本軍政下における歌については、倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』（草思社、1992年）の第6章「宣撫工作」、丸山彩・織田康孝「日本軍政下のジャワにおける歌—グラフ雑誌『ジャワ・バル *Djawa Baroe*』を素材に—」（『立命館大学人文科学研究紀要』107、2016年）などの研究がある。
- 2) 丸山彩・織田康孝「日本軍政下のジャワにおける歌曲募集—《八重潮》の成立に着目して—」、『立命館平和研究』（立命館大学国際平和ミュージアム紀要）18、2017年。以下、「前稿」と表記する。
- 3) 今村均『今村均回顧録』、芙蓉書房、1980年（改題版）、477頁（原典の刊行は1970年）。また、今村均『戦い終る 今村均大将回想録 4』（自由アジア社、1960年）では、この懸賞募集が軍政部のころみであったとされている（197頁）。
- 4) 浅野晃『ジャワ戡定余話』、白水社、1944年、45頁。浅野は、日本軍のジャワ島侵攻時より宣伝班の一員として随行しており、軍政初期の宣伝活動に深く関わった。
- 5) 同前、182頁、および浅野晃『遠征前後』、日本文林社、1944年、229頁。
- 6) 『うなばら』198、1942年10月29日、2面。この演奏には、日本の婦人と現地の女性も参加する予定であると伝えられている。なお、1942年11月2日付『アジア・ラヤ』では、午後8時半開始予定とされており、インドネシアおよび日

- 本の少女・若者によって歌われると報道されている。
- 7) 今村均、前掲『戦い終る』199頁、および角田房子『責任ラバウルの將軍今村均』、新潮社、1984年、322頁(本書は、1987年に新潮文庫に収録、さらに加筆・修正がなされ、筑摩書房より文庫化された。このちくま文庫版では422頁)。角田によれば、『八重潮』は発表会を機にジャワ全島の町から村へと広まり、日本の将兵と現地の住民が同席すれば、必ずといっていいほど歌われたという(同323頁、ちくま文庫版422頁)。
 - 8) 前稿でも言及した、摂南大学図書館所蔵の「Jaesjio 八重潮(『日本軍政下のインドネシアにおいて上映された映画』のうちの一タイトル)」を含む日本軍政期ジャワの映画のフィルムは、もとはオランダ・アムステルダム国立戦争資料研究所に所蔵されていたものが、オランダ・ハーグのオランダ政府情報局映像資料館に移管された。現在は、ハーグの映像資料館より、オランダ・ヒルフェルスムのNederlands Instituut voor Beeld en Geluid(オランダ音響・映像研究所)に移管されており、同研究所ではパソコン上からこれらの映画の視聴が可能である。また、1997年に開催された山形国際ドキュメンタリー映画祭では、『大東亜共栄圏』と映画』と題した特集が生まれ、『八重潮』が上映されている(山形国際ドキュメンタリー映画祭ホームページ<https://www.yidff.jp/home.html>、最終閲覧日:2017年9月18日)。映画祭事務局の職員によると、『八重潮』を含む当時の上映作品はデータカムにてコピーをし、山形ドキュメンタリーフィルムライブラリーに所蔵しているとのことだった。しかし、データカムで保存された映画は再生ができず、視聴が叶わないのが現状である。なお、倉沢愛子「日本軍政下のジャワにおける映画工作」(『東南アジア—歴史と文化—』18、1989年)および同『日本占領下のジャワ農村の変容』(草思社、1992)には、当時のジャワで制作された映画タイトルの一覧が収録されている。
 - 9) 町田は1942年10月には宣伝部長となった。この演説では、「ジャワ軍政監部 情報部長」と名乗っている。しかし、同年10月には情報部は宣伝部と名称を変更している。
 - 10) このような宣伝映画は、映画館で上映されたほか、移動映画隊によって、広場で上映され、無料で誰でも見られるようになっていた(倉沢愛子、前掲「日本軍政下のジャワにおける映画工作」)。
 - 11) 『アジア・ラヤ』、1942年11月6日、2面。
 - 12) 日本国内に所蔵がなかったこれらの『アジア・ラヤ』のマイクロフィルムは、京都大学東南アジア研究所図書室に新たに所蔵された。
 - 13) 同年11月6日付『アジア・ラヤ』にも『八重潮』の五線譜が掲載されている。
 - 14) 浅野晃、前掲『ジャワ戡定余話』、183~184頁より転載。1942年11月5日付『うなばら』の紙面は、後藤乾一・木村一信解題『南方軍政関係史料12 赤道報・うなばら』(龍溪書舎、1993年)に収録がない。
 - 15) 『うなばら』125、1942年8月4日、2面、『アジア・ラヤ』、1942年8月4日、2面。
 - 16) 今村均の回想によると、『八重潮』は大木惇夫と飯田信夫の肝入りで完成したという(今村均、前掲『今村均回顧録』、477頁)。大木惇夫が歌詞を選定したのであれば、飯田信夫が作曲に携わったということであろう。また、今村均、前掲『戦い終る』(197頁)および角田房子、前掲『責任ラバウルの將軍今村均』(332頁、ちくま文庫版422頁)によれば、『八重潮』の作曲は、飯田信夫と軍楽隊長の合作であったという。
 - 17) 同社は、ジョクジャカルタにおいて、日刊紙SINAR-MATAHARI(『シナル・マタハリ』)を刊行していた。
 - 18) 摂南大学図書館に所蔵されている*Indonesian Imprints during the Japanese occupation 1942-1945 Selected from the checklist by Dr. John Echols (1963)*にアメリカ・コーネル大学に所蔵されている同歌曲集の複写が収録されている。また、オランダ・ライデン大学の図書館にも、同歌曲集の原本が所蔵されている。なお、コーネル大学およびライデン大学に所蔵されている同歌曲集は、ジョクジャカルタの歌の専門家E. Wairataによって改訂されたもので、1943年2月10日に刊行されている。
 - 19) 『アジア・ラヤ』、1942年11月6日、2面。
 - 20) コーネル大学に所蔵されている同史料の複写が、摂南大学図書館に所蔵されている。
 - 21) ただし、同史料に掲載された翻訳に対しては、『アジア・ラヤ』紙上で実施された翻訳の懸賞による当選作だという記述はない。
 - 22) 倉沢愛子によれば、同歌曲集は1943年12月にジャワで編集・出版されたという(倉沢愛子、前掲『日本占領下のジャワ農村の変容』、293頁)。オランダ・アムステルダムのInstituut voor oorlogs-holocaust-en genocidestudies(略称:NIOD、国立戦争資料研究所)に所蔵されている同歌曲集の表紙には、「2604」(1944年)と明記されており、奥付はない。
 - 23) 浅野晃、前掲『遠征前後』、227頁、および浅野晃、前掲『ジャワ戡定余話』、51頁。
 - 24) この楽譜はきれいなアート紙に印刷されていたという(浅野晃、前掲『ジャワ戡定余話』、51頁)。
 - 25) 日本軍政期はジャカルタ近郊のジャティヌガラ(東ジャカルタ市)に住んでいた1927年生まれ的女性。
 - 26) この冊子は、同窓会に際して、出席者の一人が思い出の歌

の歌詞を書き記し配布したものである。

- 27) 中山正男『花をたむけてねんごろに 戦場に咲いた日本軍の人間愛』、太平出版、1966年、153頁。著者の中山は従軍記者として、「八重潮」が当選する歌曲の公募の時期にジャワに滞在していた。なお、本書は『週刊現代』（講談社）6-10（1964年3月）～6-45（同年11月）に連載されたものである。
- 28) 西谷弥兵衛『日本経済頌』（日本思想戦体系）、旺文社、1943年、1～2頁。
- 29) 同前2頁。
- 30) 今村均は、1942年11月3日の発表会を契機に、「軍隊は勿論、各村々までに普及することになり、椰子の木蔭で、島の青年や少年少女たちが、兵にせがんで、八重汐を唄いあい、つづいて日本の民謡や流行歌などを習っている有様を、私は幾度も目にしている」と回想している（今村均、前掲『戦い終る』、199頁）。
- 31) 今村均、前掲『戦い終る』、199頁。今村均、前掲『今村均回顧録』、477頁。角田房子、前掲『責任ラバウルの将軍今村均』、322頁（ちくま文庫版421～422頁）。中山正男、前掲『花をたむけてねんごろに 戦場に咲いた日本軍の人間愛』、153～154頁。亀子愿『八重汐の歌』、栄光出版社、1996年、302頁。『八重汐の歌』の著者の亀子は、農業関係の企業のジャカルタ支店要員として、1944年11月にジャワへ渡り、翌年4月にジャカルタで徴兵検査を受けた後入隊した。表題の「八重汐の歌」は、刑務所での今村均に対する《八重潮》の大合唱から付けたものだという。